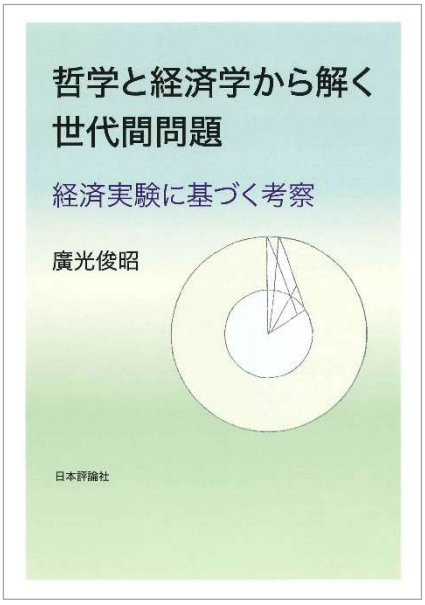
受賞作品

哲学と経済学から解く世代間問題



廣光 俊昭　著
日本評論社　280 ページ、5,400 円（税別）

書評　　道徳上の互恵と責務 問う

政策研究大学院大学客員教授　　井堀　利宏

本書は、現在世代が将来世代に対してどのような責任を負っているかを正面から問う、経済学と哲学を融合した経済哲学の書である。

気候変動問題や公的債務問題など、現在世代と将来世代の間には、世代間の利害をいかに調整するかという差し迫った課題がある。異なる世代の間で成り立つべき道徳上の互恵と責務の関係について、著者は哲学の概念を踏まえた上で経済学のモデルで議論を深め、さらに経済実験で複数世代の関わる政策決定のあり方を検証する。

現存しない将来世代も関わる世代間倫理を実現することは、そもそも困難である。本書は、例えば枯渇し得る資源の維持を容易には改正できないルールとすること（基金化）と、「他のすべての人も取ることを自分が支持するだろう行動のみを人は取るべきである」とのカントの定言命法により、世代間協力が可能となることを経済実験によって明らかにする。

協力を促す手段として熟議の役割に注目しているのも興味深い。財政政策の選択を促す実験では、仮想将来世代という設定の実験者を含めて議論することによって、現在世代の政策選好が変わりうることを示す。

世代間倫理は既存の経済学のみでは解決し得ない難問だけに、本書でも充分に解明されたとは言えない面はあるが、哲学も援用しながら切り込んでいく意欲には迫力がある。